48th GALAXY AWARDS

ギャラクシー賞贈賞式

放送作品・関係者に贈られる賞として、「国内で最高の栄誉」とも称されるギャラクシー賞。その第四八回贈賞式が六月二日、ウェスティンホテル東京のギャラクシールームで開催された。集まった放送、広告、芸能関係者は約六〇〇名。応募・選奨された作品は、四部門合わせて六三〇本。そこから、CM、ラジオ、報道活動、テレビの部門順に、入賞作がステージで表彰された。さらにその場で〈大賞〉〈優秀賞〉に輝いた作品が発表され、トロフィが贈られた。また、テレビ部門の〈個人賞〉〈特別賞〉〈マイベストTV賞グランプリ〉、ラジオ部門の〈DJパーソナリティ賞〉、そして〈志賀信夫賞〉が表彰された。（各賞については、七月号を参照のこと）

テレビ部門

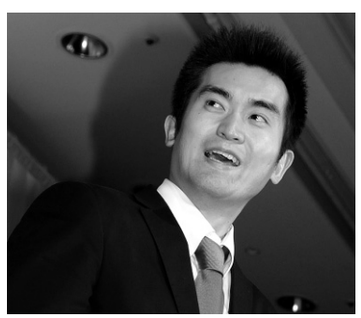
［テレビ部門・大賞］
大賞は秋田放送のNNNドキュメント'11「夢は刈られて　大潟村・モデル農村の40年」。音好宏理事長からトロフィを受け取るディレクターの石川岳さんは、「優秀なドキュメンタリーが多かった年なので、まさか大賞を受賞できるとは思わなかった。びっくりしている」とかなり興奮した様子。「減反が始まった1970年から、大潟村のことはいつもニュースの中で報道してきた。この作品では先輩たちが撮りためてきたその映像を使わせていただいた。彼らの思いを受け継ぐことができた」と語った。

秋田県生まれ、読売新聞特別編集委員の橋本五郎さんが「甲子園で優勝したような気分」と大賞受賞の快挙を祝福。

［テレビ部門・優秀賞］

NHK、ETV特集「枯葉剤の傷痕を見つめて〜アメリカ・ベトナム次世代からの問いかけ」のディレクター、坂田雅子さんは「両国の人たちの間に生まれた、新たな絆に感動した」。

「日常の中に奇跡のようなファンタジーを表現するのは、脚本家の木皿泉さんならでは。独自の世界観」とドラマの魅力を語る日本テレビ「Q10」プロデューサーの河野英裕さん。



「最初の大集結までは3週間待ちました」と語るNHK、「ダーウィンが来た！生きもの新伝説『アリューシャン　クジラと海鳥　世界一の大集結』」の香川史郎さん（NHKエンタープライズ）。

マイベストTV賞

［マイベストTV賞・グランプリ］
視聴者の評価の声を形にしたい、視聴者の気持ちを放送局や制作者に届けたい。そんな思いから生まれたのが「ギャラクシー賞マイベストTV賞」。第5回のグランプリに輝いたのはフジテレビの「フリーター、家を買う。」。“就職難や鬱病など内容は重いのに、重いだけにならず見終わった後に必ず希望が持てるような余韻が残る”“母の手にハンドクリームを塗る場面は感動した”といったコメントが寄せられ、幅広い年齢層からの熱い支持を得た。

投票者の代表としてプレゼンターを務めた大学生の藤城英里さん。

「このドラマを見て、もう一度家族のことを考えていただきたい。そして人生はどこからでも再スタートできることを伝えたかった」と語るフジテレビプロデューサーの水野綾子さん。

共同テレビプロデューサーの橋本芙美さんは「二宮和也さんをはじめ、キャストの皆さんは本当の家族のように仲が良く、撮影現場はとても温かかった」と舞台裏の様子を語った。

ラジオ部門

［ラジオ部門・大賞］
「インターが聴こえない」で構成を手がけたHBCメディアクリエートプロデューサーの後藤篤志さん。開局当時に重い機材を担いで取材にあたった先輩のバトンをしっかり受け継ぎ、それを結実させた喜びを噛みしめた。「60年前に起きた事件の謎解きだけでなく、戦後間もない騒然とした占領軍統治時代の、正義感に燃えた青春群像を描きたかった」。

［ラジオ部門・優秀賞］

ニッポン放送「ラストイニング」プロデューサーの伊藤了子さん。「解説の渡部建さんも実況の煙山光紀アナももとと原作を全巻読んでいた。作品を愛する出演者と制作者の力だった」。

2人の大女優のスケジュールがなかなか合わず収録までに1年2か月もかかったという「薔薇のある家」。「その甲斐がありました」と語るNHK制作局専任ディレクターの江澤俊彦さん。

エフエム沖縄「ゴールデンアワー」制作・演出・パーソナリティの西向幸三さん。被災後の石巻と沖縄をつなぎ、「ラジオに何ができるのか考え、悩みながら放送してきた」。

［ラジオ部門・DJパーソナリティ賞］
受賞したピストン西沢さんは、まさにその評価を受けた番組J-WAVE「GROOVE LINE Z」オンエア中のために欠席。ビデオメッセージが会場に流れ、松尾健司J-WAVE制作部長が代わってトロフィと賞状を受けた。その様子は「GROOVE LINE Z」で生中継されていたという。

［テレビ部門・特別賞］
放送開始から10年、いまや国民的な刑事ドラマとなった「相棒」が特別賞を受賞。テレビ朝日ゼネラルプロデューサーの松本基弘さん（中央）は「最初の試写のときから手応えがあった」、脚本家の輿水泰弘さん（左）は「名探偵ものとしてイメージ通りにできてきた」、東映プロデューサーの西平敦郎さんは「新しいネタが見つかれば映画の次回作も作りたい」と語った。

［テレビ部門・個人賞］
個人賞を受賞した福山雅治さん。「デビューして20年近く経つけど、このような賞にはあまり縁がなくて最初はピンとこなかったんです。けれど、周りの人たちから『すごい賞だよ』と言われ、今はとても光栄に思っています」そして、「『龍馬伝』のオファーを受けて、返事に迷っていた時、『キミしかいない』と背中を押してくれたのが故児玉清さん。この受賞を報告したい」。大河ドラマに出演したことで、「年配の男性の方からも声をかけていただくことが多くなりました」というエピソードも披露。

CM 部門

［CM部門・大賞］
大賞に輝いたソフトバンクモバイルは、参院選当日の開票速報番組に白戸家選挙シリーズの開票速報CMを流した。シンガタクリエーティブディレクターの佐々木宏さん（右）は「震災前だったが、日本を何とかしないとという思いで企画し、大物にも出てもらって盛り上げた」。電通プランナーの澤本嘉光さん（左）はサントリーBOSSで受賞していたが、大賞と優秀賞の東京ガス「お弁当メール」も手がけており、「流した本数に比べてすごく話題になったのが嬉しかった」と語った。

登壇した受賞者たち

［CM部門・優秀賞］

九州新幹線全線開業は大震災の翌日。数回のオンエアで中止になるも、動画サイトで話題に。「ありがたかった」と語る電通アートディレクター&プランナーの正親篤さん。

「今の日本を支えるのは絆。料理は家族の絆であってほしい。このお弁当のCMで、少しでも家族のことを考えてくれれば嬉しい」と語った東京ガス広報部部長の生野徹さん。

報道活動部門

［報道活動部門・大賞］
「がんとお金」という新しいテーマに挑んだ札幌テレビ放送報道部課長の佐々木律さん。普通の家庭が普通のがん治療で経済的に苦しんでいる現状を、40回以上も放送で訴え続けた。局に電話をかけ、取材のきっかけとなったがん患者の明美さんは昨年亡くなっている。「社会が動くには時間がかかる。札幌からの発信に距離を感じたことも。でも、生命保険会社からも『知らなかった』と反応をもらい、ついに制度が変わった。受賞を明美さんに報告したい」と語った。

［報道活動部門・優秀賞］

目に見えない口蹄疫を取材した、宮崎放送報道部副部長の馬登貴さん。自分たちが媒介にならないよう消毒を徹底し、当該農家とは接触できない状況でその思いを伝えた取材の苦労を語った。

1945年の365日を毎日伝え続けた琉球朝日放送報道部長の謝花尚さん。「想像以上に大変だった。いまだ広大な米軍基地が横たわる沖縄で、いつまでも1945年に向き合って放送を続けたい」。

志賀信夫賞

ラジオパーソナリティーのやまだひさしさんがお祝いに駆けつけ「新鮮で斬新なアイデアで僕たちを引っ張ってくれた」と感謝の言葉を述べた。

［志賀信夫賞］
第2回の「志賀信夫賞」は、エフエム東京、JFNの発展に尽力しただけでなく、「見えるラジオ」の放送開始や東京メトロポリタンテレビジョンの再建にも手腕を発揮した後藤亘さん。「皆さんのおかげで好き勝手にやらせていただいた。その上にこのような賞をいただき、とても感謝している」。ラジオ界の未来については「インターネットやデジタルなどテクノロジーの発展と調和を取っていくのと同時に、ラジオの持つ創造性を大事にすることが重要」と熱く語った。

懇親会

受賞書組に賛辞を送る広瀬道貞日本民間放送連盟会長

『GALAC』のギャラクシー賞ページを読むのが楽しみと語る小野直路日本放送協会副会長

懇親会の司会は露木茂さん